琉球新報　第3種郵便物認可

文化

美術月評

2月

上村 豊

検証 批判的観点欠く

県立美術館10周年展

地域から「表現の場」

松尾海彦展

2月初め、県立美術館では、昨年末から始まった2つの開館10周年記念企画展（「彷徨の海～旅する画家・南風原朝光と台湾、沖縄」、「邂逅の海～交差するリアリズム」）が共に会期を終えた。県民全体を巻き込む議論により作られた全国でもユニークな基本構想（1995年）から生まれた同館の設立10年間の活動の成果や意義が問われる、美術界のみならず、沖縄の社会・文化全般に関わる大変重要な機会であったと言える。

しかしながら、両展ともこのような注目や期待に応えるものであったのか、大いに疑問の残る内容であった。個々の作品や作家の問題というより展覧会の全体・根元に関わるキュレーションの不在・不足を強く感じた。特に残念だったのは、展示の中にこの10年に対する自己検証・批評的な観点と、美術館を取り巻く「外側」への視野がほとんど感じられなかったことである。

多くの複合的な企画や作品をひとくくりに語る乱暴を承知で言えば、両展の展示空間から感じたのはとても閉鎖的・自己完足的な空気であり、これは開館当初同館が目指した、沖縄の「現代」に開かれた「問題提起型」の美術館のイメージには程遠いものではないだろうか。

一方で美術館の「外側」では、「不純物と免疫」（1月27日～2月11日、BARRAK1）や松本太郎写真展「FAX NIPPON」（2月1日～2月7日、sksk）、丹治莉恵個展「自邸―仮設」（2月10日～2月18日、tomari）など、アーティスト個人やグループによって拓かれたオルタナティブ・スペースにおいて、今日的なテーマを取り上げたさまざまな展示・活動が行なわれた。

松尾海彦個展「近くの海」（2月2日～2月10日、浦添市美術館）

松尾海彦個展〈展示風景〉

麥谷薫の〈風の隅から〉

これら、地域社会の中にしっかりと腰を据え、自らの表現の足元を問い直すとともに、新たな「表現の場」を切り拓く活動が、今後ますます活発化し、さらにはジャンルや世代を超えたネットワークを創り出していくことを強く期待したい。

後半は、今月行なわれた2つの「卒展」を取り上げ、少し詳しく紹介したい。

「沖縄県立芸術大学卒業・修了展」（2月14日～2月18日、沖縄県立博物館・美術館）

開館10周年記念展と入れ替わるように始まった本展。表彰式や作品解説、公開講評会などのイベントが開かれた初日から多くの来場者で賑わい、沖縄発のアート・文化の最新動向に触れる場として定着しつつあることを感じさせた。県の文化の創造・振興の拠点となる芸大と美術館のさらなる連携強化に期待したい。

展示では、特に絵画専攻に意欲作が多かったように思う。中でも絵画的主題をタブローの形式に限定せず、作品と展示空間との相互作用の中に追求した麥谷薫や渡慶次ともみら「空間表現」専攻の作品と、これらとは対照的にオーソドックスな日本画の形式を採りながら、その中で絵画でしか捉えられない煌めきと深みをもった空間への眼差しを表現した徳門あいみなどが注目される。

彫刻分野では、美術館という場に依存せず、作品自体の内側に（鉄という素材に反して）軽妙な動きに富む空間を生み出そうとする吉田香世の試みの自律性が際立っていた。デザイン、工芸の各分野でも力作が並んだが、それぞれの分野での技術的修練の成果の上に表現としての現在性や批評性を感じさせる石川はづき（アニメーション）や、島袋香子（漆芸）などの作品が印象に残った。

「琉球大学美術教育専修卒業・修了展」（2月14日～2月18日、琉球大学研究者交流施設・50周年記念館）

一方、琉球大学の「卒展」は、小規模ながら出品者それぞれの取り組みを、「研究」としての背景やプロセスも含めてじっくり観ることが出来る、ゆったりとした空間が�魅力の展覧会である。

「もわ」「ぞわ」などの擬音でしか表せない「内側からの皮膚感覚」を、「くくる（括る）」「にじむ（滲む）」など「染め織り」の根元にも関わる緻密で反復的な工程を通して物象化した大山梨子。「やきもの」を一種の「いきもの」に見立て、自らの感性の枠も超えるような自己生産的でハイブリットな「形」を生み出した松田彩花。共に、「自然」「人の手」「素材」といった工芸という営みの基本的な要素に向き合いながら、同時に「きれい/みにくい」「かわいい/こわい」といった観る者の日常感覚や認識の境界を刺激する極めて現代的な作品であった。

この両義的な感覚は、高江洲ちひろの「間取り」をテーマにした作品にも共通するように感じた。建物の見えない内部とそこで営まれる私生活への妄想をドローイングや模型、メモの形に展開した一見素朴で微笑ましい表現は、事実とフィクションの境界線上で危うく揺れる作者のリアリティーの生々しい表出とも見える。

大学院生・與座花織は、半年以上通った宮城島の制作現場をそのまま発表の場として公開した。「植物の変容」をテーマにした與座の作品は余りにも繊細かつ微視的で、廃屋の強烈な存在感に埋もれがちであったが、一方で、私たちを遠くこの「シマ」に導いたのも、作者が作品にこめた、つい耳を澄ませたくなるような沈黙やささやかな呟き、その「余韻」のようなものなのである。（琉球大学准教授）

空間との作用を追求

麥谷薫 県芸卒展

「皮膚感覚」を物象化

大山梨子 琉大卒展

吉田香世の〈circulation〉ほか

大山梨子〈くくる～まぜこぜ～〉

高江洲ちひろの〈T邸〉